

百年目



笑福亭松鶴

カッタ 朝賀 大鱗

餘程寒さも薄らいで参りました。時候に合せまして百年目と云ふ、極く古いお噺を一席申上ます。少しお笑ひは尠ないかと心得ますが、誠にお作が良ふ出来て御座りますので、どうぞ斯ふ云ふ落語も聽て頂き度いと存じます。昔から人を使えば苦を使ふと、豪い良え事が申して御座ります。人にさしたるさかいマア良え哩と、放つときますると完全臺無にして仕舞はれます。夫れ／＼に眼を配つて間違ひの無い様に氣を附けて往くと云ふのは、中々大ていぢやムりまへん。

「定吉」

「へエ」

「何してゐるのや」

「紙撚を捻つてまんね」

「何ぼ程捻つたんや」

「モウ九十六本だす」

「何ぢや。朝から掛つて、唯九十六本かい」

「違ひまんね。モウ九十六本捻つたら、百本に成りまんね」

「そんなら出来たアるのは、四本丈けや無いかい」

「へエ。遅い事だすナ」

「そら何を吐すね。俺しが先刻から見てるちウと、折角捻つた紙撚で馬を造らえて、疊をトン／＼叩くと馬が動く、そんな事が何面白。要らん冗戯ばかりしてさかい仕事か渉取らんのぢや」

「ア、番頭はん、何云ふてなはんね。こら馬やおまへんで、馬にこんな角がおますかいナ。これは鹿ですがナ。あんた鹿を見て馬や云ひなはる。つまり馬鹿や」

「コラツ。何ちウ事云やがね。シヨム無い事せんと確かり捻ろツ。……藤七とん。貴方そこで何してるね」

「へエ。唯今岡山の福田屋はんへ出す手紙を書いとります」

「ア、それは御苦勞はん。御得意先への便りは缺かさんと置いとくなはれや。……併し、私が先刻硯箱の抽出しを開けて見たら、四國へ出す手紙が這入てたが、何かいな。あんな處へ入れといても先方